

## プラグ構造言語学における機能の意味

### — V. マテシウスの学説を中心として<sup>1</sup> —

§1 二十世紀言語学は、フェルディナン・ド・ソシュール以来、構造主義的な言語観を以ってその特徴とされると言われる。第二次大戦後日本においても隆盛を極めたアメリカ記述言語学のことは一時措くとしても、ソシュールをはじめとする、所謂ジュネーブ学派の学説は疾に小林英夫博士によって本邦に紹介せられ、我々の知るところとなっている。

これに引きかえ、同じく構造主義的な立場を擁するプラグ学派の学説については、トルベツコイの学説を除けば、殆んど知られていないのが、現状であるといっても差支えない。況んやこの学派が自からを他と区別するべき特徴が奈辺にあるかについても、我々は充分な知識を与えられては、いないのである。

§2 ところで、プラグ学派は他の構造主義言語学に対して、機能的言語学を標榜している。従ってプラグ学派の学説をとりあげる場合、先ずこの「機能的立場」とはいかなるものであるか、が、問われねばならない。

この学派に属する学者達の所説が、その細部にわたって全面的に一致していた訳でないのは寧ろ当然であり、相互の批判がしばしば見られることから、これらの学者達の学問に対する真摯な態度がうかがわれる。しかしながら、全体としてみた場合、この学派の機能的な言語観に対して大きな影響を与えたのは、学団の創立者の一人であり、会長でもあった、ヴィレーム・マテシウスであったと言われる<sup>2</sup>。

マテシウスは、学団の結成される以前に、すでにこのような機能的立場をとっていたのであり、従って、機能とは何か、を考える場合には、このマテシウスの所説を中心に考えてみる必要があると、思われるのである。

§3 さて我々が「言語の機能」というとき、これが「構造」という概念とどのような関係に立つものであるか、が、第一に生じる疑問であろう。素朴に考えれば、言語を一の構造として把握する事は、構造の内部に於ける機能的関係の存在を予定するから、構造という概念にはすでにこの意味での機能が含まれていると、みることもできようからである。

しかしマテシウスの諸論文には、しばしば「機能的構造主義的言語学」(linguistika funkční a strukturální) なる用語が見出され、「機能」と「構造」は明らかに相異なる概

<sup>1</sup>『水門』第7号 昭和40(1965)年8月 1-11頁。

<sup>2</sup>J. ネウストプニー「プラグ学派の構造言語学」『英語青年』Vol. CVII, No. 2, 1961.

念として、区別されている。これはまた「ソシュールの二つの基本的な考え、即ち言語の共時的分析の必要と、言語の体系という考え、は、ボドゥエンがソシュール以前にすでに表明していた言語の機能という考えと共に、間違いなく新しい言語学の構築のための、基本的な支点である」<sup>3</sup>、という彼のことばからも、明らかである。即ちマテシウスはここでその学説の構造主義的言語観をソシュールに、機能的立場をクルテネに負っていることを、明らかにしているのである。

§4 このような機能と構造の問題について、マテシウスは1936年、学団機関紙スロヴォ・ア・スロヴェスノストに発表した論文において、次のように言う。「私にとって私のこれまでの諸論文における言語の学問的な分析の基本問題は、対象とする言語が、如何に表現の二つの基本的な要求 (potřeby vyjadřovací) に対応しているか、即ち言語的命名と言語的相互連関化 (jazykové pojmenování a jazykové usouvztažení) がいかに行われているか、を指定することにあった。そしてこれに基いてのみ、私は体系への表現手段の群化 (seskupení výrazových prostředků v systém) を考察しようと志して来たのである。」<sup>4</sup>

§5 マテシウスの言う言語的命名とは、「未来の話者が、まさにその上に注意を集中し、同時に当該言語の語彙によって把握できる、という二つの条件に合致するように、具体的あるいは抽象的現実から断片を選び出す」ことであり、この「選び出された現実の断片を示す言語記号」は、「もう一つの行為」即ち言語的相互連関化によって、「相互関係の中に組み込まれ、それから有機的な全体、文、が作り出される」<sup>5</sup> のである。

即ち基本的な「表現の要求」は、言語的命名と言語的相互連関化というプロセスを通じて、コトバという形で実現されるから、逆に体系としての言語は、このようにして実現されたコトバを通じてのみ、把握されるというのである。

§6 このような「表現及び伝達の一般的な要求は、あらゆる人類に共通なものであり、言語毎に異なる表現及び伝達的手段を通分することのできる公分母」<sup>6</sup> なのであり、この故に「場合毎に考察は話者の伝達の要求から出発」せねばならない。

基本的な表現及び伝達の要求がコトバとして実現されるプロセスそのもの(特に言語的命名のプロセス)に、すでに言語の存在が予定されてはいるが、体系としての言語は、偏にこのようなプロセスによって実現されたコトバを通じてのみ、認識されるのであるから、言語の認識に際しては、主体に対する考慮を除外することはできない。このような言語に

<sup>3</sup>Kam jsme dospěli v jazykozpytu, 1931.

<sup>4</sup>Pokus o teorii strukturálních mluvnic, *Slovo a Slovesnost* (SaS), 1936 č. 1.

<sup>5</sup>O soustavném rozboru gramatickém, *SaS*, ročník VIII, 1942, pp. 88–92. これとほぼ同じ趣旨の論文が、*TCLP* の6号にある。V. Matesius, On some problem of the systematic analysis of grammar, *Travaux du Cercle linguistique de Prague*, No. 6, 1936, pp. 95–107.

<sup>6</sup>*ibid.*

おける主体の役割の評価は、アメリカ記述言語学に対する、プラーク学派の学説の大きな特徴であると考えられる。言語はやはり主観と客観のディアレクティケーの上に、存在するものである筈だからである。

§7 これと関連して注目に値するのは、マテシウスと並ぶ学団の創設者の一人、ボフミル・トルンカの言葉である。彼は言う。

言語の発展を観察すれば、言語は単に論理的・知的な諸価値の観点からのみ、判断することはできない。という認識が得られる。言語体系が言語である為には、それを体験することが必要である。それが体験される度合に従ってのみ、それは必要な表現性を獲得し、我々の〈自我〉の一部となることによって、時間及び空間における流動的發展の可能な、動的な体系に転化するのである<sup>7</sup>。

我々はここに於いてマテシウスが言わんと欲しながらも、飽くまで理智的に表現しようとして、言い得なかった核心が、表明されているように思われるのである。

マテシウスの「言語は目的的な表現手段の体系 (soustava účelných prostředků výrazových) であり、その価値は自己の目的にいかんが適合しているかということによってのみ、計ることができる」<sup>8</sup> という思想も、このような言語観の当然の論理的帰結である。

§8 これを方法論の面からすれば、「我々は直接に与えられたものとしてのコトバから体系として理念的にのみ実在するにすぎない言語へ、そして機能的な要求から、それを満足せしめる形式的手段へ進む」<sup>9</sup> ということになる。

ここでマテシウスが、これまでの「表現及び伝達の要求」を「機能的な要求」という語で置き換えていることに、注目しなければならない。両者はここでイコールに置かれているのである。これは彼が別のところで「表現の要求からこの要求を満足せしめる言語手段へ進むこと、あるいは一言で言えば機能から形式へ移行する事の利点、即ち機能的方法の利点」<sup>10</sup> と述べていることと、一致している。

§9 以上を総合すれば、マテシウスの謂う「機能的見地」とは、「言語毎に異なる表現及び伝達の手段」、即ち言語の構造の種々性の根底に存在する「人類に共通な」表現の要求が、言語の主体における「言語的命名」及び「言語的相互連関化」というプロセスを通じて、いかに完成されるか、また独自の「論理的、知的な諸価値と諸関係」から成る表現手段の体系、即ち独自の構造を有する言語、がいかにこのようなプロセス全体に照応しているか、を研究することであると考えても、よいのではあるまいか。

言語以前の主観の裡にわだかまる、無定形な「表現の要求」を満すという目的のために、

<sup>7</sup>B. Trnka, Obecné otázky strukturálního jazykozpytu, Slovo a Slovesnost, 1943, č. 2-3.

<sup>8</sup>O Potřebě stability ve spisovném jazyce, 1932.

<sup>9</sup>op. cit., viz. supra 5.

<sup>10</sup>op. cit., viz. supra 4.

言語がいかに「機能」し、このような機能を保証するために、それがいかなる構造を有しているか、を明らかにすることが必要となって来るのである。

§10 このような理解が万一誤っていないとすれば、かの Sprachvermögen と Eine Sprachen 並びに構造としてあらわれた言語の種々相、という考えとの、著しい思想的親近性をここに認めないわけにはいかないであろう。事実マテシウスは、「言語の性格を民族の性格から導こうとする努力」を批判しながらも、「共時的機能的言語学」の「主要な思想」はすでにその労作に含まれていた、として、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトを積極的に評価しているのである。またこれと関連して「言語を分析することは、はたらく〈エネルギー〉を分析することであって、もの〈エルゴン〉を分析することを意味するものでない、という思想は、彼(sc.フンボルト)が言語における機能の意義を理解することを容易にした」<sup>11</sup> という指摘も、マテシウスが「機能」をどのように考えていたかに就いて、特に示唆的である。

§11 1929年10月にプラグで開催された国際スラヴ学会に寄せて学団論集の一巻に発表されたテーゼの冒頭に掲げられた、「機能的体系として言語を理解すること」という項も、既にみたような考えの、極めて宿約された表現であるとすれば、よく理解される。

試みに訳出すれば、これは次の如くである。

人間の活動の所産であるから、言語はこの活動と目的性という性質を共有している。言語活動 (language) を表現あるいは伝達として分析する場合には、最も容易に見出され、最も自然な説明は、言主の意図である。同じように言語学的分析においても、機能の観点が考慮されねばならない。この観点からすれば、言語は自的に適合した表現手段の体系である。いかなる言語事実も、それが所属する体系への考慮なくしては、理解することができない<sup>12</sup>。

§12 表現手段は目的に適合したものであり、この故にそれは潜在的な志向性を有する。同時にそれは目的を達成するために体系性をもたねばならない。かくして機能と体系、もしくは構造は、互に他を予定し、言語の有する相異なる二面である。この故に言語の研究はこれらの二面の総合によってのみ、真に完全なものとなる。

音韻の分析に関してマテシウスが、「所与の言語の音韻体系を、その成員の構成と成員の相互関係において考察することも、可能である」が、一方「音韻要素を機能的な素材として考察し、語彙的あるいは互に連関せるコトバ(řeč)の流れにおけるその具体的な使用を考慮することも可能である」として一応両者を区別しながらも、同時に「これらの個々の方法的アプローチの結果は、相互に相補い、裏付け合い、あるいは証明し合うであろう。

<sup>11</sup> *op. cit.*, viz. *supra* 3.

<sup>12</sup> Thèses, TCLP. Mélanges linguistiques dédiés au premier congrès des philologues Slaves, No. 6, Prague 1929.

そしてこれらの結合によってはじめて、当該言語の完全なる音韻的特徴が得られるであろう」と述べているのは、まさにこのような点の指摘であると解される。序に言えば、ここから体系の成員の相互関係と機能とは、全く異なるものであることは、あきらかである。「相互関係」は、体系に属するものである。

§13 言語の構造と機能に関連して、特に興味を惹くのは、スカリチカを批判して、マテシウスが次のように述べていることである。「スカリチカは、彼のこれまでの学問的業績のすべて及び特に彼の書物が示しているように、極めて抽象的な性向を有しており、自己の考察に際して直接言語と言語体系の分析に向う。彼がコトバ (mluva) に接するのは記述文法を通じてであり、これは彼の見解によれば構造主義文法にとって音韻論に対する音声学と同様に不可欠なものである。しかし彼の興味は完全に体系に集中されており、それに含まれている資料の完全性と信頼性を詳細に点検することを、可能ならしめなかった」<sup>13</sup> のであり、このような事情が、結果として図式性へ彼を導くことになった、というのである。

少くともマテシウスの立場からすれば、言語が体系である所以は、偏にその成員たる表現手段の有する「目的性」に存すると解されるから、機能を予定せずには、体系を考えることはできない。この限りにおいては、体系からのアプローチも、「構造主義的機能的言語学の諸原則と合致している」<sup>14</sup> が、目的性を抜きにして、体系そのものに目を奪われたならば、それはテーゼにあるように「人間の活動の所産」として、言語現象を把握することを拒否することにつながる。言語をエネルギーではなく、エルゴンとしてとらえることである。

以上のことからすれば、図式性、機械的な無味乾燥さ、は実は構造主義的言語観そのものに由来するものではなく、記述方法の有する本質的な一面であるに過ぎない、という結論が導かれよう。この方法が「人間」というモーメントの捨象によって特徴づけられるからである。これは語の本来の意味におけるプラグマティズムに外ならない。記述方法が特にアメリカの土壤に開花したというのも、このような事情にその一端を負っているのではあるまいか。

言語に対する学が自己を狭小な世界から解放し、広く人間に対する学の一分科として、人文科学の中に位置づけられるためには、言語現象の根底に存する、人間性といったものへの考慮がなくてはなるまい。プラーク学派の学説にも、何かヨーロッパにおける伝統といったものの重みが、感ぜられてならないのである。

§14 以上に述べて来たような、機能と構造の関係は、音韻の面においては、どのようななるであろうか。音韻を決定する際によく引き合いに出される、所謂ミニマル・ペア、例

<sup>13</sup> *op. cit. viz. supra* 4.

<sup>14</sup> *ibid.*

えば pad と bad における p と b は、この二つの語を区別する事ができる。この語を区別する働きとは、結局「言語的命名」における働きの相違を意味して居り、この故に両者は異なった「機能」を有すると言える。このような機能の故に、両者は相異なる音韻であると認められるのである。しかしながら pad における p が「機能」し得るためには、他方で b の存在が予定されねばならない。あるいはまた m (e.g. mad) の存在も必要となろう。かくしてそこには体系が存在しなければならない。機能と構造は音韻の面においても同一物の異なる二面にすぎないのである。

このことから明らかなように、音韻 p が音韻と認められるのは、偏に pad/bad なる対立の「言語的命名」における差異に基づくのであって、p/b という体系内の相互関係によるのではない。

§15 このような「機能」を考える場合、当然明らかにされねばならないのは、所与の体系において、個々の音韻がいかに目的に適合しているか、という問題である。即ち音韻の使用の問題である。マテシウスは、「従来の音韻論的研究においては、これと反対であった」が、「私は意識的に個々の言語の使用 (využití) に関する諸問題を特に強調し、音韻体系の分析から生ずる諸問題よりも遥かに大きい部分をこれにさいた」<sup>15</sup> と述べている。ここから、マテシウスが機能の面からの研究の具体的内容を、その使用に求めていることは、明らかである。マテシウスの言葉は、体系の面のみを問題にするそれまでの音韻論に対して、機能の面の研究をも重視すべきであることを説いたものと考えられるが、これに続くトルベツコイ批判は、特に我々の興味を惹く。一部重複するが、引用すれば、これは次のようなものである。

従来の音韻論的研究においてはこれと反対であった。音韻論の実際の創造者である N.S. トルベツコイの強い理論的性向と、彼の非印欧諸語特にコーカサス諸語の知識によって、最初から音韻体系の分析のための理論的基礎が、大いなる熱意とたゆまぬ努力をもって作り上げられるという結果になった。……しかし完全無欠なものはない。音韻論の理論的基礎があまりにも普遍的であるため、大部分の研究者の信じることのできない差異までも取扱われるという……結果になった<sup>16</sup>。

この批判は、トルベツコイの学説があまりにも理論に走りすぎたことに対するものであるが、文脈からすれば、トルベツコイの学説が専ら体系の面に集中されていることに対する批判も含んでいると考えられる。従って往々見られるように、トルベツコイを以ってプラーグ学派の代表者と見做し、この学派の学説のすべてを代表しているとするのは、当たっていない。むしろプラーグ学派の「機能的立場」からは、かなりへだたりがあることを認識しなければならない。況んや彼をプラーグ学派の代表とし、この学派の学説を「音韻論

<sup>15</sup> Úkoly srovnávací fonologie.

<sup>16</sup> *ibid.*

的構造主義」と規定するが如きは<sup>17</sup>、最も甚だしい謬見と言わねばなるまい。

§16 プラーグ言語学に於いて音韻論が占める役割が、極めて大きいことは、否定すべくもない事実であるが、これは青年文法学派の歴史主義に対するアンチ・テーゼとして生じ、「青年文法学派の正当な後継者」であった「機能的構造主義的言語学」<sup>18</sup>が、自己の立場を最も容易に明らかにし得るのは、何よりも言語の音声的側面においてはなかったからである。何故なら歴史主義が言語学の主流を占めていた時期においても、言語の音声的側面の学は、常に体系への顧慮を必要とし、従ってそれ自身の裡に共時的研究方法の萌芽を包蔵していたからである。「青年文法学派の学者達は、史的言語学のみが科学的であると考えべきだというスローガンを掲げたが、音声学のみは、それが歴史的立場を考慮していないといって避難することを敢てしなかった」<sup>19</sup>とマテシウスは述べている。

音韻論は、このような音声的側面に固有の体系性に、機能的立場を導入した結果発生したものであるから、これがプラーグ学派の「主要な斗争スローガンとなった」<sup>20</sup>のも当然である。

§17 さてマテシウスに従えば、基本的な表現の要求は「言語的命名」と「言語的相互連関化」のプロセスを通じて実現されるものであった。ここから語及び文の研究が必要となる。プラーグ学派のテーゼの二章が a) 言語の音的側面に関する研究、b) 語と語群の研究、c) 統合の手続き (procédés syntagmatiques) の理論、という構成をもっているのは、正にこの故と解される。

このような機能的な立場を貫ぬくとすれば、形態論は、それが形態の面に基礎をおくものであるが為、独自の地位を失うことになる。「形式的親近性に基づく表現手段の群化を扱う形態論は、これら二つの分野にまたがっている。何故なら同一の形態論的体系の成員が、機能的には命名論 (onomatologie) にも、統辞論にも属し得るからである」<sup>21</sup>とマテシウスは述べている。

序に言えば、音韻の段階においても、所与の音声、所与の言語に於いて独立の音韻であると認められるのが、その言語における言語的命名に適合しているか否かによるのであるとすれば、この言語的命名の前提となる語の存在は、疑うべくもない事実として認められねばならない。テーゼに「言語活動を機械的性格をもった、客観化された事実として分析する言語学は、語の存在をしばしば完全に否定したが、機能の見地からすれば、語の自

<sup>17</sup>Т. А. Дмитриева, *Пути развития современной лингвистики*, III, Москва 1964.

<sup>18</sup>op. cit., viz. supra 15.

<sup>19</sup>ibid.

<sup>20</sup>Deset let Pražského lingvistického kroužku, *Slovo a Slovesnost*, 1936, č. 3.

<sup>21</sup>op. cit., viz. supra 5.

立的存在は完全に自明のことである」<sup>22</sup>と述べているのは、このような背景を考慮すれば、首肯することができよう。

§18 さて「コトバ (řeč) が、自然発生的な表現の努力から発達したことはたしかであるが、伝達の機能がやがて極めて優勢となり、我々の知っている言語形式は、第一にその(伝達機能の)必要に従って発展するようになった」のであり、この故に「今日では、表出 (mluvení) の任務は第一に伝達的なもの」<sup>23</sup>となっている。しかし乍ら、伝達的な機能が唯一のものではない。常にそこには表現機能が存在している。「コトバの基本的な機能としての伝達性と、これが表現性と絶えず混り合っていること」が考慮されねばならない。従って「情緒的なコトバと知的なコトバ」というものも「表現としてのコトバ」と「伝達としてのコトバ」との相違として、とらえられる。

文も機能的にみれば、このような「コトバを形成するもの (útvár řeči) として、これとその基本的な伝達機能を共にしている」のであり、これは従って「基本的な伝達の発話 (promluva) である。しかしながら、言語的命名によって得られた語それ自身も、基本的な伝達の発話であり、従ってこれらの語の群が文として統一されるためには、上述の規定では不充分である。これらの語群を文に統一するところのものは、「話者の主体性 (aktivnost)」でなければならない。

一方、以上の点が満たされたとしても、そのみで文が成立する訳ではない。個々の言語に特有の形式に合致する必要があるからである。即ち体系によって支えられねばならない。「文の形成が要求するまさにこの形式的通常性 (formální obvyklost) こそが、文を有効な伝達的手段となし、また同時に言語学的研究の通常資料となすのである」という指摘は、機能と体系の関係を一言に尽したものであると言いうことができよう。

§19 文に関するマテシウスの所説の中で、興味を惹くのは、イントネーションに対する彼の考え方である。これは彼の考えによれば、「必要なものではあるが、……二次的な性格のものであって、基本的なものではない。」イントネーションは、聞き手の裡に一定の文の完結性 (úplnost) を印象づける。しかしそれは「客観的な、内容の完結性、即ち文が表現するものが、単に理解可能なものであるというのではなく、主観的な形式的完結性であり、話者が言わんとした事のすべてを言い尽したことを、我々に保証するものである。

以上のすべてを総合すれば、文は次のように定義される。即ち「文は、それによって言主が主体的に、かつ形式の面において通常性と主観的完結性の印象を与えるように、一定の現実に対するとおころの、基本的な伝達の(ための)発話である。」

ここに彼の機能的見地は明らかである。

<sup>22</sup>op. cit., viz. supra 12.

<sup>23</sup>Několik slov o podstatě věty, 1924. 以下同じ。

§20 既に述べたように言語は目的に適合された表現手段の体系であるが、これはまた全体として、機能的見地から考えることもできる。テーゼに見られる *langue* と *language* の用語の差異は、このような体系と機能とに対応しているように思われる。例えばテーゼにおいて「各々の機能的な言語活動 (*language fonctionnel*) は自己の約束の体系 (*system de convention*) を有する。所謂言語 (*langue*) である」という箇所は、このような考えを裏付けるものと考えられる。

ここでは詳しく述べる余裕を持たないが、*language émotionnel* と *intellectuel*、*fonction de communication* と *fonction poétique*、*language pratique* と *théorique* 等の区別は、このような機能的立場からすれば当然扱わねばならない問題である。

かくしてこれは言語学に文学の領域へと連なる可能性を与える。

§21 このようにして機能的立場は、言語学を単なる言語を対象とする学という受動的な立場から、積極的なものに転化せしめる可能性をも、自からの中に包蔵している。何故ならそれは機能を考えることによって、常に現実との関り合いに於いて言語現象を考察することを義務づけるからである。プラーグ学派が、言語政策及び言語文化一般に対して極めて積極的に発言したのも、実は決して偶然ではなく、この学派の言語観からの当然の帰結であったと考えるべきであろう。

何れにしても、このような言語観が根底に存することを無視してはプラーグ学派の音韻論を論じようとしても、そこには思わぬ誤解を生じる危険があるように思われるのである。

\*

以上、プラーグ学派における機能の意味をマテシウスの所説を中心に、ごく大ざっぱに考えてみた。詳細については、未だ言う可きことも少くはないが、これらについては、又別の機会を得て考えてみたいと思っている。

終りにこれらの資料はプラーグのカレル大学におられる年来の友人<sup>24</sup>、イルジー・エリーネク氏の好意により贈られたものである。記してここに感謝の念をあらわしたいと思う。

---

<sup>24</sup> 当時。